19th International Conference on Engineering Design 2013 (ICED13)
参加報告

産総研サービス工学研究センター
渡辺　健太郎

去る 2013 年 8 月 19 日から 22 日まで、韓国ソウル市の成均館大学(Sungkyunkwan University)にて開催された、19th International Conference on Engineering Design 2013 (ICED13)に参加したので、その概要について報告する。

1.　会議概要

まず、本会議の概要は下記の通りである。

・会議テーマ：
－Design Processes
－Design Theory and Research Methodology
－Design Organization and Management
－Product, Service and System design
－Design Methods and Tools
－Design for X, Design to X
－Design Information and Knowledge
－Human Behaviour in Design
－Design Education

・ホスト：Sungkyunkwan University, Creative Design Institute
(Conference chair: Prof. Yong Se Kim)

・採択件数：342 件

2.　キーノート

産業界からは、インダストリアルデザイン、サービスデザインの分野で、米国、英国で活躍する経営者 2 名の発表が行われた。また、研究側からは、デルフト工科大の Prof. Petra Badke-Schaub、ミシガン大の Prof. Panos Papalambros の発表が行われた。特に Prof. Panos Papalambros から、design science に関する既存の問題認識と今後の展望について議論・提案がなされた。

3.　トピックス

筆者は主に設計知識管理、Product-Service Systems (PSS) / サービス設計、設計理論、参加型設計、設計研究の手法・方法論等のセッションに参加した。気づきとして、まず、Product-Service Systems（PSS）やサービスの設計に関する研究発表の数が増えているよ

うに感じられた。今回はホストが PSS の研究を推進していることも影響していると考えられるが、PSS やサービスに限らず、人や社会と製品の関係に関する研究も多く見受けられ、設計研究の対象範囲の広がりを感じた。

また、参加したセッションの内、設計研究の手法・方法論(Design research and research methods)に関するセッションが多くの観衆を集めていた。同セッションでは、設計研究の手法・方法論の整理、確立の必要性が論じられた他、方法論毎に異なる用語の整理、質的研究手法の設計研究における位置づけ等も論じられた。今後、設計研究を展開する上で、これまで以上にその方法論が論点となる機会が多くなることも考えられる。